

日韓幼児教育研究交流の発展のために

韓国幼児教育第 15 代会長

ソウル女子大学教授

文 美玉

おはようございます。私は韓国幼児教育学会の前会長の文美玉でございます。

日本保育学会の 2007 年度第 60 回学術大会、おめでとうございます。韓国幼児教育学会を代表して謹んでお祝いを申し上げます。又、この喜ばしい場に、日本保育学会と韓国幼児教育学会の学術協定を結ぶことを記念し、ご挨拶できたことを大変光栄と思っております。特に、日本保育学会の会長の小川先生をはじめ、理事と学会の皆様には心より感謝申し上げます。

私は本日、協定の記念のご挨拶の場をお借りして、韓国幼児教育学会の紹介と日韓の両学会の未来志向的な学術交流の方向性について、お話をさせていただきたいと思っております。

韓国幼児教育学会は 1975 年 10 月に設立し、韓国の幼児教育と保育関連の学会として一番歴史が長い学会です。韓国幼児教育学会の学術研究の主な活動は、論文集の発行と学術大会の開催です。国内の研究論文集「幼児教育研究」は、年間 6 回発行しています。又、英語の国際ジャーナル IJECE は年間 2 回、発刊しています。英文のジャーナルは、Spodek などの世界各国の学者が編集委員になっており、多くの外国の研究者たちが研究論文を掲載しています。又、韓国幼児教育学会は、近年、「韓国幼児教育のアイデンティティ確立」と「幼児教育と保育の一元化」の二つのテーマに特に力を入れて学術研究を進めてきました。「韓国幼児教育のアイデンティティの確立」は、今まで韓国の幼児教育が西欧の幼児教育理論と方法の導入に偏りすぎていたところから脱却して韓国の長所と特色を反映した幼児教育理論を確立しようとしたものです。もう一方の「幼児教育と保育の一元化」とは、韓国が幼保一元化のための努力と、現在の幼保二元化の体制を改善するために学術研究をしたものです。引き続き、今年、2007 年に新しく選ばれた学会会長と役員たちも幼保一元化の課題をこれからの持続的な学術研究として扱っていくことを理事会で決めました。すなわち、韓国幼児教育学会は幼児教育の本質に関する研究と時代の必要に応じた政策関連研究という二つの柱で学術研究を行ってきました。

韓国政府は今、幼保二元化体制の改善政策、幼、小、中、高、大学全体を対象とした学校制度の改編、幼稚園教育課程の改訂、オリニジプ(日本の保育所にあたる機関)の標準保育課程の開発と保育プログラムの資料開発を行っております。韓国幼児教育学会は幼稚園教育課程の改訂に関する研究を主管し、学制の改編や幼保一元化など、すべての政府の政策に幼児教育界の代表学会という資格で積極的に参加・協力しております。

ここからは、日韓の学術交流における未来の方向性について話させていただきます。

世界のどの国と同じく、韓国は、世界各国と学術交流をしてきました。しかし、韓国幼児教育をリードしてきた研究者たちは幼児教育の学術交流の対象と方法を求めるに当って、今まで西欧の国々に焦点を当ててきたことと反省し、これからは日本と中国などの東アジアとの学術交流がより活性化すべきであることを認識し、強調するようになりました。

私は、今、東洋・西洋が一日の生活圏になって、知識情報化の時代で全世界が一つの国のようにになっている現代においても、東洋と西洋の考え方には相変わらず違いがあると思います。この場にいらっしゃる先生方はすでにご存知だと思いますが、これらの考えに基づいて研究されている内容を少し紹介しようと思います。2001年、日本の Masuda 氏、アメリカの Nisbett 氏が、日本の京都大学学生とアメリカのミシガン大学の学生を対象に、水辺の場面を取ったアニメーションの八つのシーンを 20 秒ほど、2 回にわたって学生に見せた後、思い出した場面を分析した研究です。又、韓国の韓サンピルという研究者とアメリカの Shavitt(1994)氏は、韓国とアメリカの雑誌の広告を分析することで東洋と西洋の差を研究しました。これらの研究結果をみると、東洋の人は、部分よりは全体を見ようとする傾向があり、西洋の人は部分と事物自体を見ようとする傾向があるということでした。

これらの文化の間の考え方の違いは、長い間、流れてきた東洋と西洋の生態的な地理的条件とそれに従ってやってきた生活方式によるものだと思っています。すなわち、これらの文化間における考え方の違いはそれぞれ尊重されるべき肯定的な違いだと思います。

私は、今日のグローバル化の時代において、人類の一番美しい姿は普遍性と個性が共存する一つのオーケストラのようなものであるべきだと思っています。東アジア諸国が、それぞれの国の幼児教育のアイデンティティを確立するとともに、共通の文化圏である隣接国との間の学術交流を通して、個性と普遍性の上で幼児教育理論と教育方法を確立することが何より必要であると思います。また、東アジアの国々が一緒に知恵を絞って、東アジアの長所を生かし、幼児教育の学術基盤を拡大することはとても重要であると思います。これらの凝集された力を土台に西欧、さらには世界各国へと学術交流を広げてゆけば、より影響力もあり、深みのある学術交流が行われるであろうと私は確信します。

韓国幼児教育学会は、昨年 2006 年に、国際学術大会を世界 OMEP 本部と協力開催しました。その時、日本、アメリカ、スウェーデン、ニュージーランド、チリ、台湾、香港、インドからの学者が集まったことがあります。韓国の幼児教育学会はこれからも全世界の研究者たちと学術交流を続けていきたいとおもっております。又、このたび、韓国幼児教育学会は日本保育学会との協定を中心に、東アジア幼児教育との学術交流を中心課題として、進めていきたいと思っております。

日本と韓国の間でまず可能な方法としては、両学会が開催している学術大会に互いに参加し研究結果を発表すること、学会が中心になって両国の研究者を紹介し共同研究を活性化すること、両学会のホームページやニューズレターにそれぞれの国の情報を知らせて一般会員も学術情報

を共有すること、などがあると思います。これから、互いに協議を行って発展的な学术交流方案と内容が開発されていくことを切に期待しております。

東アジアの幼児教育分野の学术交流を活性化するために、2006年3月に、日本保育学会と学术交流協定を結んだことをとてもうれしく思います。このようなお考えの上で協定を進めてくださった日本保育学会会長の小川博久先生と、韓国と日本の学术交流のために努力を惜しまなかった日本福祉大学の勅使千鶴先生、名古屋市立大学の丹羽孝先生にもこの場を借りて感謝の気持ちをお伝えいたします。

日本保育学会の今後、ますますの発展をお祈りいたします。

ご静聴、ありがとうございました。